

問い：古墳を発掘すると、どんなことが分かるのでしょうか。



ギモン1 模様で飾られている刀の鐔はめずらしいの?

「銀象嵌」とは、鉄に文字や模様などを彫りこみ、そこに銀を埋め込む優れた技術のことです。写真の「飾り大刀」は大和朝廷でつくられ、地方に配布されたと考えられます。実用的な武器というよりも所有者の権威や地位と結びついた財(威信財)としての役割を果たしたと考えられます。

ギモン2 古墳って何?

古墳は有力者の墓です。この時代の有力者とは地方にいる王や豪族のことです。有力者は、生前、遠くからでも見える場所を選び、古墳づくりの指揮をとったことでしょう。また、たくさんの人々は、土を丘のように盛り上げたり、山を削ったりして、古墳づくりにはげんだと思われま。

ギモン3 石室からはどんなものが出てくるの?

古墳時代の時期によって特徴がちがが見られます。前期は鏡や剣、装飾品、農具などです。どれも強い霊力をもつと信じられたものが多く、葬られた首長の姿は司祭者の姿です。一方、中・後期には武器や武具・馬具なども加わります。力あふれる武人的な首長の姿が浮かんできます。

かがみちゃんの **ギモン??**



解説

古墳が全国各地に築かれた時代

弥生時代に続いて、3世紀の終わりごろ、大和地方に大規模な前方後円墳をはじめとする古墳が築造され始めます。さらに4世紀中頃には東日本でも古墳の築造が始まり、7世紀後半に至るまで、東北北部・北海道を除く全国各地に数多くの古墳が築造されます。この間の約400年間を古墳時代といいます。

丘陵の頂部に築かれた陣馬塚古墳

陣馬塚古墳は上信越自動車道の建設に伴って発掘調査され、現在は道路の切り通しにより消滅しています。上田市東部の上田インターチェンジ付近、標高600mの丘陵地に位置し、南方眼下の染谷台からは約50m高い位置にありました。本古墳からは、千曲川右岸の上田盆地を一望できました。また、周辺にはほかに古墳は見当たらず、当地域では唯一の古墳で、南側の古墳側面に出入り口を持つ横穴式石室という埋葬施設を持っていました。現在、古墳の石組みは、実際にあった場所から西側の玄蕃山公園の見晴台に移築されています。

石室からは3人分の人骨と、壺、瓶、甕などの土器類、直刀9本、鉄鏃43点、耳環7点、玉類194点などの副葬品が出土しています。人骨は、鑑定によると、壮年から熟年の頑丈な男性、性別不明の成人、1歳から1歳半程度の幼児であることが分かりました。また、出土した剣は、鐔に刻まれたC字状の模様やその配列等から、6世紀末に製造されたものと考えられています。

参考：長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書41 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書21 上田市内・坂城町内 1999

問い：古墳時代の長野県にはどんな特徴があったのでしょうか。



ギモン1 どうして長野県で馬具がたくさん出土するの？

古代になり中央政権の騎馬力を支える、多くの官牧がシナノで営まれていたこととの関連が指摘されています。背景には、山がちな地形の信濃では、多くの荷物を運ぶ峠越えに馬が必要不可欠な運搬手段だったこと、広く涼しい信濃の高原は、馬を育てるのに適していたことなど、騎馬の供給源となりうる条件が整っていたといえます。

長野県古墳の4基に1基は馬具が出土していて、近隣の県の中でも群を抜いています。特に飯田市周辺の下伊那地方で、馬具が副葬された古墳の数は、全国有数です。

ギモン2 なぜ馬を飾ったの？

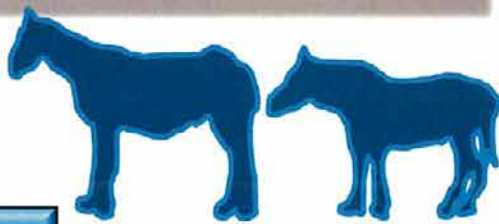
鞍や鐙、轡などは乗馬に必要な馬具。一方、杏葉や馬鐙、環鈴は馬を飾るための道具です。馬を飾ったのは、銀象嵌と同様、馬の所有者の権威を示すためと考えられます。大陸から渡ってきたそれまで見たことがなかった馬に、多くの人々は驚いたにちがいありません。また、杏葉は馬が動いたときにキラキラと光り輝いたことでしょう。

木曾馬はこの頃の馬の子孫と考えられています。体高(肩までの高さ)が約130cm、明治時代に軍用として導入されたサラブレッドの体高は約160cmです。明治までの馬は、今よりも小さいものでした。

ギモン3 須恵器って何？

須恵器はろくろで成形し、密閉した1,000℃以上にもなる窯で焼き固めるので、非常に硬く、丈夫なため、大きな土器をつくれるようになりました。また、一度に大量生産することも可能になりました。また、須恵器をつくる窯は、製品の原料となる粘土、燃料(木炭)、水が豊富な場所に立地しました。

県下最古の窯跡は、6世紀前半の松ノ山窯(長野市)です。最初は貴重だった須恵器が、奈良・平安時代になると日常の食器として徐々に多くの人が手にするようになっていきました。



解説

馬は人や物を運ぶだけでなく、戦いの武器としても活用

古墳時代のシナノにはたくさんの馬が飼われていました。馬は人や物を運ぶこと以外にも、戦いでは今の「戦車」のような役割を果たしたと考えられています。武装した何頭もの馬は、相手に無言の威圧感を与えたことでしょう。当時の馬は、現在、競馬場で見かける足や首が長いサラブレッドではなく、木曾馬のように足が短く、首が短い馬でした。馬具には馬に乗るための鞍や鐙、馬をあやつるための轡などがあります。また、馬にさまざまな装飾金具や鈴をつけて華やかにすることで、馬の所有者が周囲の人々に力を見せつける役割があったと考えられます。このような馬具が古墳から出土することは、死後も被葬者の力の大きさを後世に伝えようとした意図が感じ取れます。

古墳時代につづく奈良・平安時代には、シナノでは中央政権の騎馬兵力供給地として、諏訪・松本・長野・佐久地域で多くの牧(官牧)が経営されていました。※この馬をあやつるシナノの兵は、672年の壬申の乱で、大海人軍の勝利に貢献しました。(※参考:『積日本紀』)

須恵器づくりー山深いシナノにも伝わった渡来技術

古墳時代の「土師器」は、縄文土器から続く素焼きで、茶色をした土器です。一方、「須恵器」は、器をきれいに成形できる「ろくろ」でつくり、高温で効率よく炎をあてることができる「窯」で焼かれた青灰色をした硬い土器です。この朝鮮半島から伝わった新しい土器生産技術のように、シナノでも5世紀後半から6世紀前半には須恵器を使用し生産する、新たな渡来技術の波及がみられます。

問い：長野県にはどのような古墳があるのでしょうか。



ギモン1 積石塚古墳はどんな古墳なの？

長野市松代町大室にある大室古墳群は、5つの支群からなる5世紀から7世紀にかけての500基以上の古墳群です。普通の古墳は土を盛ったものですが、大室古墳群の全体の7~8割は石を積み上げた古墳です。積石塚がこれだけ多い古墳群は、全国的にも他にありません。また、石室は、朝鮮半島との関わりが指摘されている、天井石が手のひらを合わせたような「合掌形石室」となっています。

平安時代の『延喜式』には「大室牧」の文字がみられ、大室周辺に馬を飼育する牧場があった可能性が指摘されます。また、168号古墳からは馬形土製品、その他の古墳からは馬頭骨・馬具など、馬に関わる遺物が出土しています。現在でも「牧島」・「一等牧」・「室牧」といった牧に関わると考えられる地名が残されており、古墳に埋葬された人々は馬の生産に関わった、渡来系の人々であったことが指摘されています。

ギモン2 長野県にはどんな古墳が、どれくらいあるの？

文化庁文化財部記念物課『埋蔵文化財関係統計資料』（平成25年刊）によれば、県内2,666基の古墳のうち、前方後方墳6基、前方後円墳48基、円墳2,492基、方墳50基、不明70基とあり、全体の95%が円墳です。このような傾向は全国各地、また、県内のいずれの地域においても同様です。

1ページにある陣馬塚古墳のような円墳は古墳時代後期に爆発的に築造されます。古墳時代の終わりごろには、せまい範囲をおさめる首長までもが、古墳を築造するようになり、絶大な権力を誇示するという古墳本来の役割が少しずつ失われていきます。

解説

バラエティーに富む2,600基あまりの県内の古墳

県内で最も大きな古墳は千曲市の「森將軍塚古墳」で、形は前方後円墳です。この古墳の形は大和朝廷との関係を示すもので、今から約1650年前の4世紀中頃に築造されたと考えられています。この古墳に葬られた人物は、シナノのクニの王として大和朝廷との結びつきを強めた人物と考えられます。また、県内で最も古い古墳は松本市の「弘法山古墳」で、形は前方後方墳です。今から約1,700年前の3世紀末頃に築造されたと考えられます。この古墳からは、鏡やガラス玉、剣などの副葬品が出土しました。その他、古墳時代中期から後期にかけて善光寺平の千曲川右岸に、朝鮮半島との関係が指摘される合掌形石室を埋葬施設とする積石塚古墳を含む、500基もの古墳が群集する大室古墳群が築かれます。また、古墳時代後期になると南信地方では、「高岡第1号古墳」をはじめとする、横穴式石室を伴う前方後円墳が多く築かれます。これは、馬の生産や管理にかかわることによって畿内有力者との関係が背景と考えられ、大和朝廷における東国支配の拠点づくりの結果と考えられます。

竪穴式石室と横穴式石室

埋葬施設である石室には、大きく2種類あります。竪穴式石室は、ひとりの被葬者のためだけの石室で、古墳の頂部に設けた竪穴に遺骸を安置し、板状の石でフタをして埋葬します。これは古墳時代前期にみられるもので、森將軍塚古墳の石室は全国最大級の規模を誇ります。一方の横穴式石室は、遺骸を安置する石室に何度でも埋葬できるよう、古墳側面に入り口を設けています。これは古墳時代後期にみられ、身分の高い人々の家族に限られた「家族墓」とも考えられます。

問い：古墳時代の人々はどのような暮らしを送っていたのでしょうか。

ギモン1 古墳時代の人々はどんなものを食べていたの？

朝鮮半島から伝わったカマドの構造に合わせて、胴の長い甕や底に穴の空いた甕^{こしき}といった調理道具が登場しました。これらを重ねて使用することで、米を蒸して食べていたと考えられます。「焼く」、「煮る」という調理方法以外にも、「蒸す」という新しい調理方法が取り入れられました。蒸した米を「強飯^{こわい}」といい、他にも炊いた米やお粥もあったようです。また、麦、ヒエ、ソバ、大豆、小豆等の雑穀も蒸して食べていたと考えられています。

ギモン2 古墳時代はどんな時代だったの？

古墳時代には馬の飼育やカマドの他に、須恵器づくりやメッキ・象嵌の金属加工技術なども大陸からもたらされました。また、農具や武器、馬具などの金属製品の生産・加工技術、水田などの土木・灌漑技術も進歩しました。

一例を挙げれば、弥生時代から古墳時代前半にかけて、水田の形は不成形で、広さもまちまちでした。それが古墳時代後半になると、大きな区画の中に、約2m四方の整然とした、ほぼ同じ面積の水田がみられるようになります。また、大土木工事により灌漑用水路も完備していました。

古墳時代は新たな技術や製品を大陸から取り入れながら、自分たちの暮らしに合うように、人々が工夫した時代であったといえます。

めしろせ 博物館などでできるオススメの体験

こちらで紹介した博物館では、まが玉づくりや弓矢、土器づくりなどの体験ができることがあります。特に長野県埋蔵文化財センターでは8月上旬に行われる、夏休みチャレンジ教室で「埋文体験」が人気です。くわしくは各博物館のHPをチェックしてみてください。



解説

弥生時代から続いた生活を一変させた古墳時代のかまど

今から約1550年前の5世紀中頃、古墳時代中期以降、シナノにカマドが伝えられました。竪穴住居の壁ぎわに設けられたカマドは、熱効率が高い画期的な炊事施設として、6世紀以降、各地に普及しました。それまでの戸とは違い、カマドは側面が石などで組まれ、その周りを粘土で覆うため、火力を効率よく使用できるなどの特徴を持っています。また、カマドに使用した土器を支えるための柱状の支脚を用いることにより、効率よく甕の底に火が当たる構造にもなっています。

古墳時代から平安時代の遺跡では、カマド跡の周辺からカマドにかけるのに適した胴の長い甕や、底に穴が空いた甕=蒸し器などの土器が出土しています。人々は甕をカマドにかけてお湯を沸かし、米などを入れた甕をのせて、蒸気で蒸すことで柔らかくして食べていたと考えられます。

古墳時代中頃に、ひとりひとりの食器が登場

古墳時代の後期になると、朝鮮半島から一人一人が食器をもつ風習が伝わりました。そのことを裏付けるように、5世紀後半以降の遺跡から、坏や埴、鉢とよばれる茶碗などの小さな土師器の出土数が急激に増えていきます。これらの土師器は、須恵器が伝えられたことにより作られ、使用されることとなりました。このことにより、古墳時代中頃から現代の生活のように、食事ごとにひとりひとり食器を使うようになったと考えられます。また、今から1,400年前の飛鳥時代以降、全国的に須恵器生産が盛んになり、シナノでもそれまで貴重品、希少品であった須恵器が、一般に使われるようになりました。